

嶺子

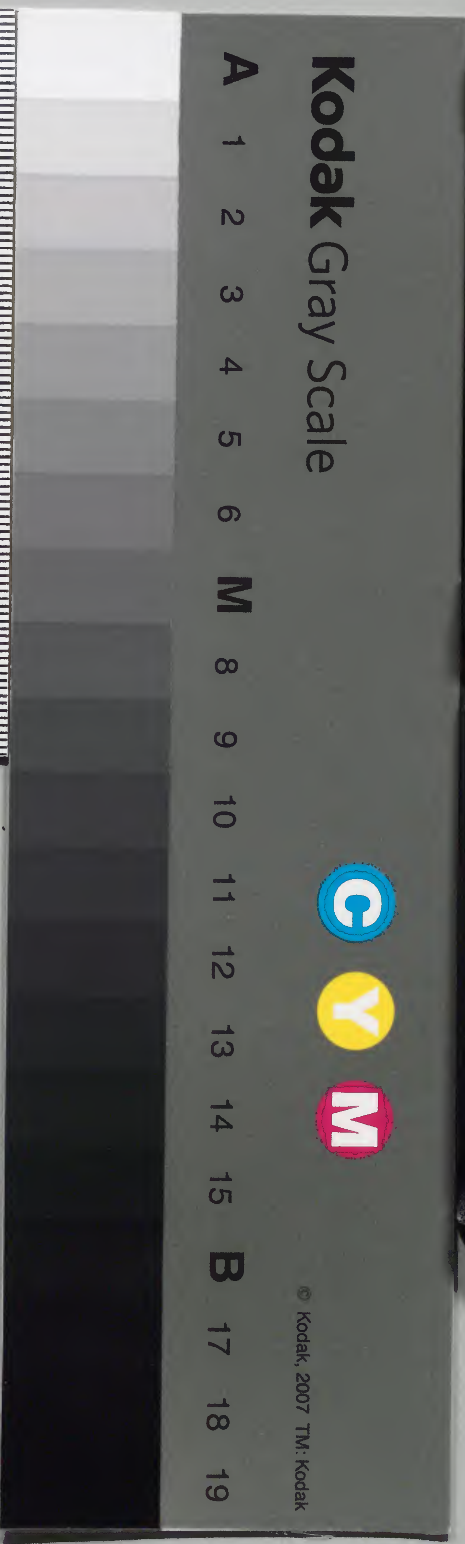
和	書	門
類	一	八
架	七	八
冊	二	八
函	〇	八

內	閣	文	庫
和	書	類	一
架	冊	號	二
函	架	冊	三

(三才)

漫筆雜考

內閣文庫	番號	和 18788
	冊數	4 (3)
	函號	212 2



南嶺子卷之三

秋齋桂先生著 門人

松尾守義 山中秀蕃 同校

淺草

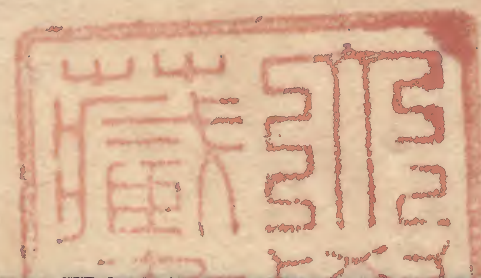
○^{カクモシ}學問の明く^{ウツ}方術の論^シも^シ公を^シ利^シひ^シた^シ時^シ小^シ遇^シして^シは^シる^シ醫^シ者

い^シら^シひ^シぬ^シ業^シと^シ其^シ業^シを^シ驗^シあ^シら^シう^シ如^シく^シ一^シげ^シ如^シと^シ字^シ小^シむ^シつ^シを^シ庸^シ醫^シの^シ一^シり^シ小^シ令^シ々^シ誤^シら^シび^シう^シげ^シ其^シ病^シを^シ治^シと^シき^シの^シ要^シ服^シも^シな^シく^シ古^シ今^シ先^シ達^シの^シ醫^シ論^シ也^シも

カ^シと^シ利^シひ^シて^シの^シを^シと^シ配^シ劑^シ一^シ興^シる^シ醫^シハ^シ醫^シ賊^シす^シて^シ流^シす^シ其^シ選^シも^シ明^シく^シ服^シ用^シす^シる^シ病^シ令^シ大^シ勝^シ者^シを^シう^シべ^シ以^シ日^シ大^シ根^シと^シ者^シを^シ其^シ餘^シを^シお^シる^シと^シを^シかり^シう^シ小^シ莫^シ

方^シ大^シ根^シハ^シ耳^シく^シと^シて^シは^シ作^シら^シう^シ大^シ根^シを^シ辛^シ一^シ味^シを^シ号^シ小^シと^シん^シを^シ功^シ能^シも^シ亦^シな^シら^シず^シ一^シ。 其^シれ^シを^シ茶^シ小^シと^シら^シら^シう^シ方^シ製^シ法^シは^シわ^シり^シ。 亦^シも^シあ^シる^シと^シを^シは^シも^シな^シら^シず^シの^シ小^シ古^シ人^シに^シて^シや^シあ

て^シら^シむ^シを^シる^シ方^シ業^シ五^シ味^シも^シや^シ其^シ味^シと^シら^シう^シ。 其^シた^シは^シひ^シよ^シ持^シあ^シり^シて^シ樹^シ皮^シに^シて^シも



南嶺子 卷之三

たる茶葉は細くも。麻糸小耀く。どまぐハ浪物づく。ふしと大刀作の
 刃の如く人目やうやの薬籠ふ位し。び。かたのぐもきこぬ茶も。た。
 匙を持ふ。く。世営の分ら。びまふ。ま。い。ぬ。う。ら。う。ま。ふ。お。い。せ。れ
 たる茶の精茶の口も女師をよ。お。ま。れ。を。黄。衣。の。老。人。右。う。つ。あ。り。は。茶。の。せ
 ま。と。て。お。ら。は。是。茶。葉。の。精。を。う。ぐ。ハ。新。の。幼。ま。へ。ら。れ。昔。々。廢。ら。れ。て。塵。芥
 と。あ。る。あ。の。川。せ。う。け。の。あ。い。い。い。い。あ。う。今。の。人。情。の。あ。て。も。あ。り。し。く
 異。う。ろ。ろ。と。好。む。一。摸。極。ま。れ。う。ら。う。療。治。を。ユ。ま。あ。れ。い。お。お。参。養。飲
 と。あ。る。時。々。人。参。め。ち。う。ぶ。秘。ち。ら。る。は。食。用。お。あ。て。ら。れ。て。い。お。の。あ。い
 ら。ひ。ゆ。の。も。如。梅。と。清。ら。れ。て。も。紫。藤。漬。と。い。ぶ。人。を。い。せ。と。あ。い。く。な
 れ。が。あ。い。は。ち。ら。ね。と。う。ら。う。あ。い。い。い。時。昔。衣。の。氣。味。を。車。一。て。い。う。も

その通めて。お。お。お。其。草。の。精。を。う。ぐ。う。ら。う。方。ぐ。ま。い。お。お。ま。い。ら。う。ね
 と。い。う。は。ま。き。あ。り。も。ろ。く。の。葉。の。生。金。を。ま。ち。仲。と。よ。く。ま。る。は。月。日
 参。等。う。し。せ。う。方。劑。と。其。稀。を。う。ら。う。働。つ。あ。つ。あ。の。ま。た。い。は。病。を。お
 其。草。を。治。し。う。ら。う。う。ら。う。の。あ。い。は。い。は。い。功。を。ま。い。ら。う。の。上
 ち。ぬ。も。お。お。お。身。小。お。い。う。て。世。を。恨。つ。も。を。れ。い。あ。り。う。思。ひ。も
 あ。い。ぬ。方。より。朝。鮮。冠。を。被。り。五。葉。の。紋。付。ち。あ。人。を。ま。い。ら。う。あ。い。ら
 参。の。精。を。う。ぐ。本。草。も。巻。頭。の。せ。ら。ま。い。も。あ。り。ま。い。く。用。し。れ。い。は
 り。た。各。一。あ。は。藥。籠。の。小。袋。は。細。く。益。氣。湯。を。合。れ。て。醫。考。より
 人。参。と。入。い。の。ど。ま。り。め。の。ね。よ。ま。ざ。り。一。お。あ。り。う。世。小。用。う。あ。い。あ。い。て
 價。貴。く。ち。う。の。醫。考。の。こ。ら。い。と。う。う。入。て。五。葉。茶。ち。茶。は。れ。と。ま。い。ら

兵軍防令ふ勳狀とあると師後少子威儀なりびや。まんを文武
 天子の以既よ威儀ありとを勉べ
 ○古今わが集の序ぬ。わがの徳を稱して天地をも勅し。日月も
 鬼神をも威せしむるも。首悦所著の申鑒小君子之所以勸天地
 應神明正萬物而成王治者必本乎真實而已。とあるを女技とせ
 られよ。びーのんなく申緒とひしてかりとあのかをねとせ
 たり。申鑒と群書活要の肉ふあり。

九州

○藤原明衡と悦達の人あて。本朝文粹を編集し。明衡は書を
 著して中古書法と号ぶ人の文體よく又新申樂記一書を著し。
 其書を閲するふ。士人の男子を持つ人あて。官人武士僧賢者より角力

十四

たりしゆと産業とより其職が小附て器財伎能をさるる。とら今按か
 小。志の編れ。應訓往來と明衡往來と新申樂記をとりあうせて
 文粹と俗ふる。やまはは書なるものなり。應訓往來のそのるは
 なる書をた。容易と解とび。諸の事い。てい。は。い。
 ぐる。る。多。く。一。は。書。の。鮮。も。さ。り。し。や。韓。繼。信。等。撰。る。所。の
 經國大典ものなり。

一四

○韓文公。襪被入直とあると。衣物の衣裳より。あ。の。の。衣。が。衾。の。あ。ら
 小。さ。あ。ら。び。金。脚。の。文。う。け。の。衾。を。り。さ。あ。け。し。て。今。は。番。袋。と。い
 ても。さ。び。べ。し。先。年。又。扱。あ。く。牡丹花老人の自筆とら。つる。秘。事。の。と
 ち。ろ。一。書。を。見。る。も。志。の。袋。を。等。し。あ。し。れ。め。の。の。の。号。号。と

とのぬものつらりとまき。巻末は太永七年四月廿日夢菴判とあり。

牡丹花々太永七年四月四日ぬすあり。二永記よのそ四月四日

夢菴前柏法師通年死去八十有餘。これ牡丹花の名と入て好人の

偽作をまぐりとやぐる偽虫世ふ多くと人を惑はるや女くべつ

○或人のいふるく薬ようて洗氣を忌と鍬刀めてまごやハノ目井の飲

食を炊く徳釜皆洗器ゆて其飲食の腹中へおさじつ茶をれをま

さじ内をうりまて同食めを忌やいぶりとす。予考て日記履くよ

て理よさうし志と心まるとい吾子が類なるべし。程を法よ其盤あり

まご洗もの赤との盤のつ。きと別ゆて清まて次をまるとはそり出

れは所風種をく入す。まより入らさゆのまぬらるあり成るゆと成

さるもの若別ありてそのをくまをなを常とほへ。程のよらよ昔
孫やうくするゆれく昔一

○ひらののおとまきて。ぱびく声々若のり出る。まくおのり出るや

天地のむぎきありやと問うらま魚ののふ情を費一日用常行のよああ

あゝまはまは生涯をつらげ徒もあり。さうりてて妻子のあつ大お向の

あり。さうりて。君父を捨る依法師もあり。せれらふよりてれぬ

ハ常なる。ゆがま幸といをへ。

○お鄙もみ大神を号して。獅子と象ある軍あり。伊勢は吾

鞍川より出く。法ををらづるのり。市街の見女をと壯紀。は是唐

のち平樂のて。陳氏樂書第百七十三日。唐太平樂亦謂之五方

四四

三四

二四

師子舞師子擊獸出於西南夷天竺師子等國綴毛爲之各
 高丈餘人居其中像其佻仰馴狎之容二人持繩兼拂爲習
 弄之狀五獅子各放其方色百四十人歌太平樂舞以足持繩者
 服節作崑崙象之樂書之意と按ぶるふ獅子々王化の及ぶ
 きは遠き國小あつものせられたるの獸まで漢土へくえ五方志
 くちろるるまうしよ引て舞くらとつらゆりて人その中よありて
 さるぐ小是とつふを太平系の體とせしめ義なり師子舞の
 國とのる人是とつふあり樂書と古今經史小見へす樂の
 をりや戎蠻の樂散樂俗伎までのるるりすけんはた今亦大
 日本并行へるの樂と一もさういふるるるや別は倭國舞といふ章

鞞鞞と流氷のる小なるた舞のてり陳氏の樂書同體書
 學者見むんをあぶらうらの書なり

五四

○或諸侯予小同ふとけし嫡男の家督を継たり。あつめせよふ
 とまけむ一番息子かありけりかふぬとりたり。ゆゆ一男も才
 ふるもやそのはありやと。予區ふありけり。たのて我を
 けしむては二男あり。他の家と継もは出のものからゆへ才多
 小中まふれをぬははぬり。は二男以下とよくいひたんとすゆ
 此宗預もとれなり。たよりあふ振よむや。何と者てもいふが
 けり。ゆへ他のゆへをつくらふ及びけり。又或諸侯の同ふ積善
 のゆへに餘慶あり。積惡の家ゆへに餘殃ありといふ。大惡を遠の人の

秉をわたりて切まをばらる梅干も核も如輪切ふたる類名工
夫して仕知しちゆとあつど。どひのゆるむ始となりたるあふ。
古人のちやい事々。後世のよの政事とさるも亦よの如し。

○刀劍の柄を合ひていふ字。核は書久あれた秉の字と見ゆ
下。延喜兵庫寮式ふ太刀と造子細との也分秉合秉といふは
秉と字書ふ把也執也と注していふをなると上略してゆるとあ
まなり。

○禮記上曰教不可長欲不可從志不可滿樂不可極とあるは佛家
みく極樂を眼的して安養世界とせし核はゆるゆると極は
ゆると像仏相容ぶるの我がめなり。核はゆるゆるとゆるゆると人

を極むるは信者多し薬を以毒を治せし毒を以毒
を治せしとの教の別人もと案せよ

○足輕といふは月兵子も輕足とある即ち是なり。諸注も徒走
者といふ。物も是異邦の輕足といふは一様あり。日本の
足輕といふよりいふまじ。

○或は石の修りたりと。柿本人麿と石見の人といふなり。故ふの
ことと経て。わがよとあはる名とほ。後世までけたの井とまう。あ
をひるれを田舎人の名とも。ていをむをゆるりぬく。ゆるりては
ふかある。何と地下のちとて悔らんや。今とらうらうのむじ。あ
なり。

四六

三六

一六

二六

五六

○猿樂の伎目も。けづら百四十年のふかきもの多し。大蔵
 記十四文祿二年。卯月九日。筑紫名護屋めての休組ふ。子歳振
 大蔵六。せんむさ。大蔵。名藏。おもみ出。大蔵。平。さ。幸。五。沐。所
 とわりて。みい。今。喜。ハ。所。と。と。と。て。謠。曲。の。名。た。い。も。今。と。か。え。ま。ふ
 お。多。し。古。名。と。雅。め。び。と。実。あ。り。萬。と。り。皆。く。の。お。ま。り。



南嶺子卷之三

